様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月１３日現在

機関番号：３２６３１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２７２０１２５
研究課題名（和文）　19世紀フランス文学における異郷

研究課題名（英文）　Foreign Lands in French Literary Works of the 19th Century

研究代表者
畑　浩一郎　（HATA KOICHIRO）
聖心女子大学・文学部・講師
研究者番号：20514574

研究成果の概要（和文）：19 世紀はフランス人の世界観が急速に拡大した時代である。「異郷」はそれゆえ同時代の文学作品で豊かな展開を見せるテーマとなる。本研究ではこの概念の時代的な変遷を考察する一方で、その描かれ方と作中での役割を散文作品（旅行記、小説）と韻文作品（詩）の双方で検討した。その結果「異郷」は作家個人が自らの世界観を再構築するための触媒としての役割を果たし、またその対概念である「故郷」とも複雑な関係を取り結んでいることを確認した。

研究成果の概要（英文）：In the 19th century, French people's view of the world widened considerably. Therefore, 'foreign lands' became a rich and important theme in various literary works of this period. Our research examined not only the historic evolution of this concept but also how 'foreign lands' are described in journeys or novels as well as in poems. We noted that 'foreign lands' served as a catalyst for some writers who were trying to reconstruct their vision of the world and also that this concept was often considered with its antithesis: 'homeland'.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１２年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：(1) 異郷 (2) オリエンタリズム (3) エキゾチズム (4) 19 世紀 (5) 旅行記 (6) 文化相対主義 (7) オリエント (8) 地中海

1.　研究開始当初の背景

研究代表者は19世紀フランスのオリエント旅行記を専門とし、西洋とは異なる土地を訪れた文学者たちの印象や考えを考察してきた。旅先で彼らの関心が向かう事象は多々あるが、とりわけ人間に向けられるまなざしはきわめて興味深い。言語、民族、宗教、生活習慣など、多くの面で自らとの違いを見せる現地の人々に対して、旅行者たちはさまざまな見解を積み重ねていく。こうして「他者」という概念を綿密に検討する必要が生じ、「19世紀フランス文学における他者の表象」（平成20-21年度　若手研究（スタートアップ））においてコーパス

を旅行記から小説や詩作品にまで広げた上で考察した。

こうした検討の中で「他者」というのは単独に考察すべき問題ではなく、「他者」を生み出す環境、さらには「他者」を取り巻く現実上、想像上の空間との関わりのもとで考えていく必要があるという考えに至った。ここに「異郷」というテーマが浮上してくる。この問題を考察するにあたっては、当時のフランスを取り巻く国際状況や、この時代に進歩を見せる言語学、民族学などにおける知識を援用するという可能性が予見でき、そのことにより19世紀フランス文学における「自他」の問題に新たな光を当てることができると考えた。

２．研究の目的

「異郷」は古来より「ユートピア」「エル・ドラド」、あるいは「ジパング」などの名前をまとって西洋人の空想をかき立てていた。当初は「どこか遠くにある夢の国」といった素朴なイメージと結びついていたこの語はしかし、19世紀に入るとより複雑で多様な意味合いを担っていく。本研究の目的は、こうした「異郷」をめぐる考え方の変遷を当時の時代背景、とりわけフランス人の海外進出と関連させて検討しつつ、「異郷」がこの時代の文学作品にどのように描かれ、またいかなる役割を作中で負わされるのかを分析することにある。

研究の出発点として挙げられるのは、「異郷」という概念はそれぞれの時代の世界観、地理的感覚と密接に結びついているという仮説である。たとえば17世紀後半のフランス人にとっての「異郷」とはもっぱらギリシアやローマといった地域を指すことが多かった。それはこの時代に復古的に高まったヘレニズム文化への関心が背景にあったからである。また18世紀に入り旅行者や航海者たちがさまざまな土地の見聞を報告するようになると、その知見が文学作品にも取り入れられるようになる。アベ・プレヴォの『マノン・レスコー』におけるアメリカ大陸、ルソーの『人間不平等起源論』におけるコンゴなどはその好例である。

こうした視点に立つと、19世紀フランス文学はきわめて独自でかつ豊かな考察対象となる。ナポレオン・ボナパルトのエジプト遠征（1798-1801）以来、フランス人の世界観は急速に拡大し、これまで知られていなかったさまざまな土地についての情報が膨大に集積されていくからである。フランス人の目は今や地中海を越え、アフリカ大陸や中近東、さらには遠くインド、中国や日本にまで向けられていく。またこうした土地を実際に旅する人も増え、「異郷」はより具体的なイメージをまとうのと同時に、より個人的で実存的な深みをも獲得していく。

こうして複雑でかつ豊かな意味合いを担っていく「異郷」というテーマを、まず旅行者の直截的な経験を踏まえて執筆される旅行記を材料に検討する。さらにそれがより自由な形で展開される小説などの散文作品、あるいは時として高度の抽象性を持って構成される詩作品についても考察していくことが本研究の目的の主眼となる。

３．研究の方法

以下のような問題について、具体例とともに検討した。

(1) 「異郷」という概念についての論理的考察。「異郷」というのは単なる地理的な隔たりだけが問題なのか、あるいは時間という要素もそこに関係するのか。するのであればどのような形をとるのか。

(2) 19世紀を通じて「異郷」はどのようなイデオロギー的変遷をたどるのか。「異郷」は素朴な「理想郷」としてのイメージからいつ、どのような形で脱却するのか。そこに付与されていくのは常に肯定的価値なのか。否定的な面はないのか。あるとすればどのような性質のものか。

(3) 時代背景の変遷とその文学作品への影響。19世紀にフランスは大きく海外へ進出する。1830年のアルジェ攻略により北アフリカ地域への植民が始まり、また弱体化するオスマントルコ帝国に対してはその利権をめぐり他の西洋列強諸国と激しいつばぜり合いを繰り広げる。インドシナ、メキシコへの出兵も行われる。19世紀初頭にトルコを訪れたシャトーブリアンと、世紀後半になって同地を旅したロチとでは当然、その印象は大きく変わってくるはずである。「異郷」はこうした国同士の力関係の変化の中でどのような質的変化を被るのか。

(4) 「旅をすること」と散文作品（旅行記、小説など）の関係。19世紀は多くの文学者が実際に国外へと足を運び、旅先での経験を文学作品に取り入れるということがかつてない規模で行われた時代である。旅行記は直截的な旅の体験を綴ることが前提とされるが、そこにはさまざまな作家の思想が実は鉱脈のように張り巡らされている。「異郷」はどのような形でそこで利用されていくのか。またフロベールの場合のように、旅経験は直接旅行記の形を取らず、後になって執筆する小説の中に間接的に取り入れられることがある。小説舞台の設定・演出に「異郷」をめぐる作家の体験はどのように作用していくのか。

(5) 「旅をしないこと」と散文作品（詩）の関係。「異郷」は必ずしも旅をした文学者だけに特権的なテーマとなるわけではない。むしろ旅をせずに、自国にいて思い描かれるほうがより豊かなイメージを喚起することも多い。そしてそれは限られた語に多くの意味を託す詩作品に顕著に見られるはずである。実際ユゴーやボードレールのように、旅をすることなく、異国への憧れを詠った詩人は多い。そうした作品

では「異郷」はどのように描かれ、どのような価値を付与されるのか。

４．研究成果

大きく以下の3点に要約される。

（1）19世紀初頭に「異郷」が文学創造において果たす役割は大きく変化する。前世紀には作家の哲学的、政治的、あるいは美学的見解を表明するための道具立てとして設定されることが多かった「異郷」は、シャトーブリアンの『パリからエルサレムへの旅程』（1811）を契機として、作家が実際に対峙し、またそこから文学営為を開始するための起爆剤としての役割を果たすようになる。それは時にフランスやヨーロッパのありようを対比によって明らかにする鏡として、また時に作家自らの実存の底へ降りていくための通路として、文学作品の中でさまざまな形で利用されていく。

（2）散文作品における「異郷」のあり方を考察するために、ポーランド出身の貴族であり大旅行家でもある作家ヤン・ポトツキが19世紀初頭に全編フランス語で執筆した大部の小説『サラゴサ草稿』を取り上げた。この小説は日本ではまだほとんど知られていないが、物語世界のダイナミックな転換、そこに『千一夜物語』式の夢幻性がちりばめられていること、さらにはイスラーム支配時代のスペインにおけるキリスト教とイスラームの関わりが物語進行の駆動力として置かれていることなどから、「異郷」という問題を考える上で第一級の研究素材となる。引き続きこの作品の検討を重ねることで、「異郷」というテーマが散文作品において持つ可能性についてさらに掘り下げて考えることができることを確信した。

（3）「異郷」というのは必ずしも外に向かう視線によってだけ特徴付けられるのではない。時として内に向くまなざしとともに考える必要がある。詩人ラマルチーヌとゴーチエに共通して見られる、自分の出自はオリエントにあるという妄想はこの点で興味深い事例となる。これは異郷に対する個人的な思い入れが極度に押し進められる傍らで、自国フランスに対してある種の違和感、時として強い幻滅を感じることから生じている。異郷と故郷が取り結ぶ関係はここでは逆転し、異郷はもはや作家の外部にあって憧憬の対象となるものではなく、作家の内面において複雑なアイデンティティをめぐる問いかけを誘発する役割を果たしている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

1. 畑浩一郎「異国への郷愁、「出会い」の美学 —— テオフィル・ゴーチエ『コンスタンチノープル』読解の試み ——」『聖心女子大学論叢』、査読無し、第120集、2012年12月、pp. 41-56
https://u-sacred-heart.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=71&item_no=1&page_id=13&block_id=17
2. Koichiro HATA “*Le Manuscrit trouvé à Saragosse* par Jean Potocki – Essai sur les remaniements de l’œuvre”, Acte du colloque international《 Balzac et alii, génétiques croisées. Histoires d’éditions 》、査読無し、2012年11月
http://balzac.cerilac.univ-paris-diderot.fr/wa_files/Hata.pdf
3. 畑浩一郎「『サラゴサ草稿』研究序説」『仏語仏文学研究』東京大学仏語仏文学研究会、査読あり、第43号、2011年、p. 15-39
4. 畑浩一郎「ヨーロッパとアジアの狭間にてテオフィル・ゴーチエ『コンスタンチノープル』(1853)」『仏語仏文学研究』東京大学仏語仏文学研究会、査読あり、第42号、2011年、p. 79-91

〔学会発表〕（計５件）

1. 畑浩一郎「旅行者ゴーチエと変遷するトルコ」、ソフィア国際シンポジウム 「テオフィル・ゴーチエと 19 世紀芸術」、2012年5月20日、上智大学（東京都）
2. 畑浩一郎「ヤン・ポトツキ『サラゴサ草稿』をめぐって」地中海学会第35回大会、2011年6月19日、日本女子大学（東京都）
3. 畑浩一郎「近東を旅するフランス人―１９世紀のオリエント旅行記から」ブリヂストン美術館土曜講座、地中海学会秋期連続講演会「異文化交流の地中海」、2010年9月25日、ブリヂストン美術館（東京都）
4. 畑浩一郎「オリエントを旅するフランス人―１９世紀の旅行記から」地中海学講座「イスラームとヨーロッパの出会い」、2010年9月11日、朝日カルチャーセンター（東京都）
5. Koichiro HATA “Vingt ans de remaniement, Jean Potocki, *Manuscrit trouvé à Saragosse*” 国際シンポジウム《 Balzac et alii, génétiques croisées. Histoires d’éditions 》、2010年6月4日、パリ第7大学（フランス）

〔図書〕（計３件）

1. 畑浩一郎、他『フランス文化事典』、丸善出版、2012年、pp. 376-377, pp. 444-445, pp. 454-455

2. 畑浩一郎、他『満鉄と日仏文化交流誌「フランス・ジャポン」』、ゆまに書房、2012年、pp. 105-121
3. 畑浩一郎、他『フランス文化　55のキーワード』、ミネルヴァ書房、2011年、p. 116-119, p. 176-179, p. 200-203, p. 232-235

６．研究組織

(1)研究代表者

畑　浩一郎（HATA　KOICHIRO）
聖心女子大学・文学部・講師
研究者番号：20514574

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし